

فرضته من رفض لهيمنة حضارة بعينها، وللضغوط التي تسعى لفرض مفاهيم مغايرة للثقافة والمسلمات.

ثانيًا: عرض لما أسفرت عنه تلك الهيمنة والضغوط في التجربتين من ردود أفعال؛ دفعت اليابان للقيام بدور سياسي أثر على مجريات الأمور في آسيا، بل العالم في فترات زمنية مختلفة.

ثالثًا: النظر إلى ما قطعه الطرف الياباني من خطوات - وإن قصرت أو قل عددها - في طريق علاقه مع العالم الإسلامي، وبالتالي مع ثقافة العالم العربي ومنطقة الشرق الأوسط.

وبهذا يخلص البحث إلى رؤية للأنماط اليابانية في تواصلها الثقافي مع الآخر، وذلك حيث يمكن في ضوئها وضع بعض الأسس لإنجاح ذلك الحوار، والتي يُوصي بها البحث؛ كي نصل إلى ما نريده من نتائج وثمار، يكون لها ما نأمله من تأثير إيجابي على مستقبل العلاقات بين الطرفين، وذلك من خلال الوقوف على المطامح المشتركة والطموحات الخاصة بكل طرف، وكذلك اقتراح البحث لآليات إنجاح مثل هذا الحوار.

مقومات حوار الحضارات بين اليابان والعالم الإسلامي

د. عصام رياض حمزة (*)

مفهوم "حوار الحضارات" من المفاهيم التي شاعت في الأدبيات الدولية منذ تسعينيات القرن الماضي، وقد جاء ردًا على مفهوم "صراع الحضارات" الذي نحتته هنتنغتون عام ١٩٩٣. وفي إطار الحوار الحضاري، وبدافع الحرص على التواصل الثقافي مع الآخر من الأمم والشعوب صاحبة الحضارات - كان هناك حرص على تواصل ثقافي مباشر بين اليابان والعالم الإسلامي ككيان ثقافي وحضاري متنوع العناصر.

وحرصًا على إنجاح هذا التواصل الذي يتم للمرة الأولى بشكل مباشر دون وسيط ثالث؛ حرصت أوراق هذا البحث على النظر في المقومات التي يجب أن يقوم عليها مثل هذا الحوار، ومدى ما يمكن أن يلقي به من نتائج وتداعيات على مستقبل العلاقة بين طرفي الحوار. وذلك من عدة جوانب:

أولاً: النظر إلى اليابان ذلك الآخر، وما قطعه من تجارب في حوارهِ وتواصلهِ مع أكبر حضارتين أثرتا في تراثهِ الثقافي الإنساني إلى الآن: وهما الحضارة الصينية والحضارة الغربية؛ لنقف على نتاج التجربة اليابانية من خلال العلاقة بينها وبين كلتا الحضارتين وموقفها من كل منهما، والذي يفترض أنه كان من منطلق مشروع قومي تحددت معالمه وفقاً لمقتضيات العصر، وما

(*) أستاذ مساعد بقسم اللغة اليابانية، كلية الآداب - جامعة القاهرة.

注 :

①日本とアジア、中国からの外来文化、また、日本思想史におけるその影響について下記の著書が参照できる。

- ・ 三枝充恵、今井淳編『東洋文化と日本』 ペリカン社、1975年
- ・ 家永三郎『日本文化史』 岩波新書、1982年
- ・ 加地伸行『儒教とは何か』 中公新書、1990年
- ・ ヘルマン・オームス『徳川イデオロギー』 黒住、清水、他の共訳
ペリカン社、1990年
- ・ 子安宣邦『江戸思想史講義』 岩波新書、1998年
- ・ 尾藤正英『日本文化の歴史』 岩波新書、2000年

②日本と西洋文化との経験について次は参照となる。

- ・ ドナルド・キーン『日本人の西洋発見』 中央公論社、1968年
- ・ 『西洋見聞集』『日本思想大系』 第66巻 岩波書店、1974年
- ・ 田中彰『開国』 日本近代思想大系 第1巻 岩波書店、1991年
- ・ 司馬遼太郎『明治という国家』 日本放送出版協会、1988年
- ・ 色川大吉『明治の精神』 筑摩書房、1968年

③その書物の例としては、

- ・ Sir William Muir, The Life of Mohammed, London, 1858~61
- ・ William Gifford Palgrave, Narrative of a Year's Journey through Central and Eastern Arabia, London, 1865
- ・ Thomas W. ARNOLD, The Preaching of Islam, London, 1896
がある。

④日本とアラブ、中東を含むイスラム諸国との関係について、

- ・ 杉田英明『日本人の中東発見』 東京大学出版会、1995年
- ・ 田中逸平『イスラーム日本の先駆』 拓殖大学、創立100年記念出版、
2002年
- ・ 中岡三益『現代エジプト論』 アジア経済研究所、1979年
などがある。

⑤大川周明には、『回教概論』慶応書房、昭和17年（1942年）がある。
その他のイスラムに関する諸研究もあり、昭和25年（1950年）に
『古蘭』即ち、『クルアーン』の日本語訳が岩崎書店より出版された。

- 政府高官や著名人のみならず、後世に継続されるように若者間の交流を促進する。
- 両側の教科書での相手に関する誤報などを、協議を通して正すべきである。それは今後継続されるべき交流を担う後世が取り分けイスラムについての誤った知識、相手に関する正しい知識に基づく関係を築かなければならないからである
- 両側の様々な機関、団体の合同会議を促進し、有識者がお互いの経験から学ぶ場を与えること。

以上のようなことが提案されることが、本稿の結論とするところである。

- ー 相手の文化思想への尊重を以て、両者が対等に対話すること。
- ー 対話に参加する様々な分野の者に対して、自国の文化を科学的に認識させると共に、相手の文化の基礎知識を与えるなどの啓蒙的な教育が行われること。
- ー 対話は宗教の布教、伝道のためではないことを認識すること。

5. 対話の手法

イスラム世界が日本の外交政策において、重要な位置を占めるようになり、両者間の対話の意欲が注目されている現在、それを実施する具体的な手法として次のことを提案する。

- ー 日本の外務省が構成したイスラムを研究する会を例として、両者の専門機関においては、各分野での合同委員会を構成し、シンク・タンクとして機能する。

イスラム社会において、思想的、文化的にも貢献できるのである。

日本文化が持つ独自性には、中東問題のような難題を解決することへの貢献が期待できる。

アラブ・イスラム世界の方も、日本との対話を通して、イスラムを正しく直接に紹介できれば、日本社会においてイスラムに関する近代以来の誤解も取り除く機会が得られるであろう。また、日本が積極的に協力すれば、イスラム世界が今日まで、やむを得ず欧米に委ねてきた諸問題も正当な解決が得られると思われる。

さらには、イスラム世界の研究機関や非政府団体などが、日本でそれぞれ対応する機関や団体との協力により、さまざまな分野での発展が期待される。

4. 成功の条件

このような対話を成功させるには、両者が相手の今日までの文化史、他者との経験を踏まえながら、下記のことを必要な条件とするのである。

すると思われる。

3. 対話の目標

日本とイスラム世界との対話が実現することによって、いわゆる「文明の衝突」は迷信であると証明される。即ち、日本の思想、文化の重要な基盤を成す仏教、儒教ないし儒学とイスラム思想との共通点が明らかにされ、相互理解が深まることによって、アジアのみならず、人類文明は豊かになると期待されるのである。

また、アラブ・イスラム世界とアジアの思想を国家社会に応用的に適用することに成功した日本が共に、東アジア地域において重要な役割を果たすばかりではなく、国際的に主体として存続できるのである。

それによって、日本は、東アジア地域並びに西アジアのイスラム諸国、さらには、アフリカのムスリム民族においても日本の存在を強化することが期待できる。日本もまた、アラブ・イスラム社会のインフラ、経済開発などの企画に参加できると同様に、アラブ・

来、イスラム諸国は、イスラムを明白に敵視するようになった西洋諸国との対話を、政府と民間レベルによって実施しようとした。

ところが日本は、20世紀の90年代に開始した橋本首相の「ユラシア外交」、小渕首相の「シルク・ロード外交」に続き、2001年1月、当時日本の高野外相が着手したアラブ・イスラム世界との対話イニシアチブは、アジア安全保障政策の一環であった。それも、21世紀の世界的安定に貢献しようとする日本の現われであったと言えよう。

以前に他文明との経験は、時代別において日本国家の形成過程に影響があったが、その文明との係わりは日本に意図されたことでもあった。従って、日本が文化的、戦略的な意味を持つイスラム圏との対話を提案することは、国家上のプロジェクトの一面を持つことであると思われる。

欧米が、世界の安全をイスラム文明との衝突によって実現しようとする時に、日本は文化国家として対話という手段を選択して「アジアの安全保障」を計ろうとしている。

アラブ世界はイスラム世界の指導的立場にあるので、日本とアラブ世界との協力は、アジアにおけるイスラム圏の安全保障に貢献

第二次世界大戦以後の冷戦体制、また冷戦終焉以来の新世界秩序の下での日本は、西側の一員でありながら、東洋的な側面を強調して、近隣諸国との関係を修復しようとした。イスラム国を含む東南アジアへの技術提供をし、中東のイスラム圏とも直接に交流を行うようになった。それは経済大国を目指していた現代日本にとって資源圏、貿易区域として大変重要な事である。

従って、イスラム圏の安全、あるいは日本との関係の安定は日本にとっても重要な課題である。そして21世紀に日本が担おうとしている役割にとって「イスラム世界との文明間対話」は重要な意味があると思われる。

2. 日本のイニシアチブとしてのイスラム世界との対話

日本がイスラム世界への特別な関心を持ち、対話を計ろうとしたのは、2001年9月11日の事件より数ヶ月前のことであった。その事件には、数名のイスラム教徒が関わっていたため、西洋、イスラム両文明の衝突を証明することとして取り上げられた。それ以

たと思われる。

明治の日本は世界に開かれ、様々な文化、思想を受容するように最も重要な役割を果たしたのが、当時、盛んであった翻訳運動であろう。しかし初期の段階に訳されたそのヨーロッパ書物からは、イスラムは排他的で戦闘的な宗教であるというイメージを残した。

③ さらに、西洋列強に伍しようとしていた近代日本においては、「脱亜入欧論」が流行したため、イスラムは突き放すべき非文明的なアジア民族とその文化、思想の一部を成すものとみなされた。

それにも拘わらず、イスラムが日本に直接紹介されたのは20世紀初頭、海外でイスラムに改宗した日本人の先駆者によるものであった。彼らはイスラム理解において、伝統的と言える「神仏習合」という妥協の方法に従って、神道概念を通じてイスラムを導入したのである。④

日露戦争（1904～05年）で勝利を収めた日本は、第一次世界大戦を経て20世紀前半までの間、アジアにおける西欧に対抗する戦略の一連として、イスラム研究を施行した。大川周明（1886～1957年）を中心とする当時のイスラム教研究は特筆すべき大東亜秩序建設を目指す地域研究であった。⑤

えよう。②

日本が満たした条件は、あくまでも西洋文明の物質的な面のみであり、精神的な面においては、日本と西洋諸国の相互理解は十分ではなかったため、物質的な衝突で終わった経験であった。

3. 日本とイスラム世界 :

16世紀の日本が経験した西洋文化は、イベリア半島を舞台にしたイスラム文化との摩擦、さらに衝突によって形成されてきたものである。しかし、イスラムに関する知識は、18世紀初頭（1715年）の新井白石著による『西洋記聞』に記録された情報だけで、間接的で不十分であった。

日本とイスラム世界との直接の出会いは、19世紀後半に明治政府が1880～81年、ロシアへの戦略の一面としてイランとトルコへ使節団を派遣したことだった。両者の間には、文化、宗教などの相互理解が出来るような交流はなかったと言えよう。近代日本におけるイスラムに関する知識のほとんどは、中世以後のヨーロッパ書物の翻訳によるものであり、また、アジアにあるイスラム世界の一部に関するものは、漢文の書物によるものしか得られなかつ

は植民地を持つことであった。

日本は西洋文明の両面を理解するため、数回にわたって欧米諸国に200名の知識人を派遣した。しかし、日本は儒教や仏教を受容した時と同様、西洋文明から、自国の近代化を助ける要素のみを取り入れた。固有の文化を精神的な基盤としながらも、西洋の近代思想から伝統文化を豊かにする概念を導入したので、西洋近代文明の母体とされていたキリスト教は其中ではなかった。

国家の近代的骨格が完成されてから、キリスト教は一つの哲学、思想として、押しつけられたのではなく、自主的に導入され、特にプロテスタント系の学校が設立されたのである。

日本は、西洋型にはまらない、独自の近代文明を確立したことが、日露戦争の勝利によって確認されたと思われる。

こうして日本は、短期間で独立が脅かされた小国から、アジアの近隣諸国を侵略する側に転回したのみならず、ロシア帝政に勝ったことで当時の大国の条件を満たしたと思われたのである。

東アジアの伝統的秩序の破壊後、日本は異なった文明を背景とする西洋型の新秩序に対応することに成功し、アジアで最も早く独自の路線で時代の条件に合った近代国家を実現したことになると言

アジアでは日本が近代化の先駆者となり、中国との関係は近代において、対等というよりも、文明的に優位を得たと思われるのである。

2. 日本と西洋文明 :

東アジア地域における中華秩序が、当時のグローバリゼーションとして見られるのであれば、16世紀の大航海時代以来展開された西洋の精神文化や物質文明もまた、当時の新世界秩序であったとも言えるのであろう。

日本が西洋文化の両面を最初に発見したのは、ポルトガル人がキリスト教の布教と銃をもたらした戦国時代であった。16世紀末と17世紀初期の日本は、安定した国家社会を目指していたため、植民地化の危機を持つ貿易と、妥協できない宗教に対して、禁止令を出すしか方法がなかったのである。

鎖国日本は、西洋書物は勿論、中国語でのいかなる宗教に関する全書物をも入国禁止としたのである。

第二の日本の西洋発見は、西欧列強が形成した、19世紀秩序の中でのペリー来航によるものであった。西欧の世界秩序における文明は強国に必要な不可欠な要素であり、さらに、強国の条件として

国家とは異なる行動をとった。いわゆる文永、弘安の役で、時の鎌倉幕府であった日本は、元艦を沈没させて中国に勝利した。それは日本の中華秩序からの最初の脱却だと思われる。

さらに、16世紀においてはヨーロッパ諸国による「大航海」によって中華帝国の一部が失われたことから、中国は東アジア秩序の中心的な位置を維持出来なくなった。

豊臣秀吉（1536～1598年）による文禄、慶長の役は、その意味でも著しい出来事として位置づけることができる。秀吉の朝鮮出兵は、アジア文化圏において、中華秩序に代って日本を中心として、仏教、儒教を背景とする新秩序の構築を目指していたと思われるからである。

その結果、日本は独自の文化を確立しようとして、中国文化を中心に外来文化の軌跡を取り除こうとする「国学」という文化思想的な運動が開始された。それも日本が自ら決定した鎖国制度の下で230年の間、国粹的な文化の特質を形成しようとした。①

しかし、近代において、明治日本は、中国より西洋の近代化を早く受容した後、独自の近代化をすすめたのである

一方、中国は、日本を通して西洋の近代化を受け入れた。即ち、

1. 日本の「他文明との経験」について

1. 中華秩序 :

古代以来、東アジア地域における中国の文化的、文明的な「中華秩序」に対する日本の対応は、独特であったと思われる。

日本文化において、大陸、とりわけ中国文化の影響が大いにある。

「漢字」と共に儒教思想が宗教的な概念抜きに導入された。

仏教もまた、最初には、宗教と言うよりも、政治思想として6世紀に取り入れられた。もともと宗教として一般に普及された平安時代においては、神仏習合など日本古来の信仰との妥協を経てからであった。やがて、鎌倉時代になると、日本独自の仏教が確立され、逆に中国に紹介されるようになり、日本も文化的国家であり得ることが証明されはじめた。また、文明度が高い日本の工業品も中国市場で出現したにも係わらず、日本は、中国と対等の関係を得られなかった。

しかし、13世紀後半の蒙古襲来では、中国は日本に対して文化

ではなく、ただ力の強化と物質的なものにとどまるという理論である。

こうした構想には文化、文明の交流より分裂、衝突が重要であり、「衝突」を今後の世界の主流的な文化として根ざさせる主張もあると思われる。

そもそも、「衝突は」文明的な行為ではない。人道を重んじる文化を基盤にした文明は、他者との交流、相互理解への手段として対話を選択するのである。

本稿は、アラブ、イスラム側の立場から、上述の「文明の衝突」論における固有の文化を持ち、他の文明と親近感を抱かなくてもよいと言われる日本と、東アジアの諸問題に主要な役割をはたせないと思われたイスラムの世界との対話を可能と考え、その実現を考察するものである。

対話が進むためには、相手がいかなる世界観を持つか、そしてそれを構成した、いわゆる「他文明との経験」はどのようなであったかについての基礎知識が必要であると考えられる。それらの知識を足場にして、その対話を成功させる基本方針を提案できるのである。

21世紀の日本』（鈴木主税訳、集英社新書）のはしがきには、

「東アジアの国々の属する文明は六つ（中華、東方正教会、日本、西欧、イスラム、仏教）に分かれており、そのうち四つの文明の主要国である中国、ロシア、日本そしてアメリカが、東アジアの諸問題に主要な役割をはたしている。」

と述べて、イスラムと仏教が東アジア地域において主要な役割を果たせない文明として外したのである。そして日本について次のように述べている。

「日本には固有の独特な文明があり、その日本文明は、他の文明とは異なり、この一つの国に特有のものだ。したがって、日本は他の国々にたいしておのずと文化的な親近感や敵意を抱くことがなく、それゆえに日本が望むならば、自国の力の強化と物質的な繁栄だけを目指して、外交政策を遂行できるのである。」

以上の東アジアにおいては、西欧文明を代表するアメリカがアジアのイスラムより影響力を持つべきとする。そして、アジアの文化、思想を古代から受容して独特の文化を築き上げた日本が、他の国々に対して文化的な親近感を抱かなくても、世界との係わりは文化的

日本とイスラム世界との文明間対話の基盤

Dr. イサム R. ハムザ

カイロ大学 文学部

はじめに :

1993年にアメリカのハンチントンが著わした『文明の衝突』は学界に波紋をなげかけた。その著書において、21世紀の世界をアメリカにとって適当に編成できるように、各文明地域の「衝突」が不可欠な条件になるという理論である。それは冷戦終焉以来の世界体制は、一つの超大国になろうとしているアメリカによって構成されるのであろう。しかし、冷戦時代のイデオロギーに代って、文化および文明によって行動が決定される他の数地域の大国は、世界におけるアメリカに次ぐ影響力を争い対立するという。

従って、「文明間対話」というスローガンは、著者が読み取ろうとしたその後の世界図とその背景にあった「文明論」に対して、異なる世界観を持つとする主張である。

さらに、ハンチントンが2000年に著わした『文明の衝突と

日本とイスラム世界の文明間対話の基盤

Dr. Isam R. Hamza
Cairo University
Faculty of Arts

